

2015年度を振り返って

2015年度は（も）、慌ただしい日々が続いた。ようやく年度末と年度始めの喧噪も過ぎようとしている。2015年度に行ったいくつかの新しい取り組みを紹介する。

・台湾との共催展示会

昨年10～11月には台湾新北市立十三行博物館との共催により、国際交流展「美と技と祈り～台湾原住民の植物利用と南九州人の軽石利用～」を本館にて開催した。台湾原住民のうち「アミ族」「タイヤル族」「カバラン族」の伝統的な織物・衣装等を紹介した。これまでの国際交流展は、海外から資料を借用して本館が実施するものであったが、今回は共催として十三行博物館の学芸員も展示作業に加わった。

また、1～3月には、当館の所蔵資料を台湾十三行博物館に輸送して展示会（「晴れの国 神話の郷 宮崎県立西都原考古博物館収蔵文物特展」）を実施した。当館の資料を海外に持ち出しての展示会は初の試みであった。南九州の古墳文化に加え、宮崎県の自然や神話についても紹介した。



台湾新北市立十三行博物館での展示会

・古代復元住居再生事業

昭和40年代の風土記の丘整備事業において建設された古代復元住居の茅葺き屋根を葺き替えるもので、専門の業者に委託するのではなく、県民参加型のイベントとして行うものである。西都市銀鏡地区には、現在も茅葺きの技術を継承する方々がいる。この方々の指導と協力を得ながら、茅の刈り取り、檜木の伐採や皮向き、蔓の採取など、材料確保の段階から県民参加で行った。貴重な伝統文化と技術を実際に体験し、それらを記録に残すことを第一の目的とした。2016年度は、いよいよ茅の葺き替え作業を実施する予定である。秋の完成を目指している。



古代復元住居

・ ICT を活用した博物館情報の多言語化の取り組み

当館の展示室のパネルに書かれている文章は全て日本語のみである。音声ガイドには、開館当時から日本語版の他に英語版・中国語版・韓国語版を用意しているが、情報発信の主たるものである解説パネルの文字情報は日本語のみであった。そこで、スマートフォンやタブレット端末を利用して、QRコードを読み取ることで日本語の他に英・中・韓の3カ国語で表示されるシステムを開発した。併せて、アイビーコン (ibeacon) を利用して、自分自身が展示室のどこにいるのかを表示する展示室マップも整備した。また、館のホームページも多言語化し、スマートフォン版 HP も整備した。こうした取り組みは、外国からの来館者に対応することで、当館の情報を国外に向けて発信することを目的としている。

・ 古墳群の調査と地中レーダー探査

2015年度は、101号墳、265号墳、女狭穂塚周辺の発掘調査を実施した。101号墳は第2-B支群に位置する小円墳であるが、地中レーダー探査の結果から方墳である可能性が指摘されていた。今回の発掘は、墳形の確認と築造時期の把握を目的とした。その結果、一辺約15mの方墳であり、女狭穂塚やその陪塚である171号墳と共通する特徴をもつ埴輪が樹立していたことが明らかとなった。埴輪の出土状態から、築造後の一定期間経過後に埴輪を破却する祭祀が行われていた可能性も浮上し、非常に貴重な調査となった。今後は、復元整備に向けた継続調査を実施したいと考えている。

265号墳の調査は、2014年度から継続している。2014年度には左くびれ部に造り出しを持つことが明らかとなり、西都原では女狭穂塚に次ぐ2例目として注目された。2015年度には、大正時代に発掘された後円部墳頂平坦面の調査を実施し、大正時代の調査状況を明らかにした。また、墳丘東側では第1周堀の外に周堤帯と第2周堀が存在する可能性が指摘された。2016年度も継続して調査を実施する。

女狭穂塚周辺の調査では、陵墓参考地外で特別史跡の指定からも外れている民有地部分に対し、地権者の同意と協力を得て地中レーダー探査と試掘調査を実施した。これにより、女狭穂塚の第2周堀の状況が明らかとなるなど大きな成果を得た。

西都原考古博物館は、開館から12年が経過した。設立の理念と目標を実現すべく、職員一同、日々奔走している。また、2016年度は学芸普及担当が1名増員となり、7名体制となった。求められるものも更に高まるものと思われる。今後も走り続ける覚悟である。

(東 憲章)